

私の思う優しさ

(原文)

飯田 陽美 (16 歳)

長野県

文化学園長野高等学校

優しさは人それぞれ違います。私の思う優しさは、その人の気持ちを理解して、寄り添うことだと思います。私が本当に優しさを感じた体験談を 2 つしようと思います。

1 つ目に、私は生まれてから小学校 4 年生までの間で、9 回の転校をしてきました。別に転勤族だったわけではないです。その時その時で、色々な事情で、1 年も住まずに引っ越し、転校もありました。そのため人と仲良くなるのが得意になり、馴染めないなんてことはほぼありませんでした。しかし、その反面、別れが惜しいと思はず、涙することなんてそうそうありませんでした。ある小学校で転校が決まりました。転校することをクラスみんなの前で言った時もちろんみんな悲しんでくれたし、「離れてもずっと友達だよ。」って言うてくれました。でも、すぐにお互い疎遠になるのだろうなと思っていました。当時一番仲良くしていた子には、「あたし今までたくさん転校してきていて、たぶんまた転校すると思う。」と伝えていました。つまりその子には何回も転校していると伝えていたのです。その時一番長くいた小学校で、ほんとに仲が良かった友達でした。今回も忘れられちゃうかな。そう思いました。毎回そうだからです。そこから離れる自分は覚えていても、その場において年月を変わらず過ごしている側は 意外と忘れてしまいます。そんなことを思いながら転校しました。しかし、その子は毎年ハガキをくれました。また住所変わっても送ってくれました。それが来るたびに、ものすごく嬉しかったです。そして思い出がよみがえりました。そして 6 年越しに 2 人で会えました。その子の優しさであるその行動や言動のおかげで、その場その場での出会いを大切にしたいと思えるようになりました。

2 つ目は、高校に入ってからソフトボールについてです。ソフトボール部は部員が足りず、私は助っ人として大会や、練習に参加していました。でも私は、小学校 5 年生から、小学校 6 年生までの、約 1 年間しかやっていなくて、ずっと前からやっていて今も現役の部員の人たちとは比べ物にならないくらい下手でした。でも、部員のみなさんがとてもレベルが高いので、全国大会にコマを進めました。恐縮ながら下手くそな私も行きました。あたしはとても不安でした。「練習についていけるのかな?」「足引っ張ってばかりじゃだめだ。」と。あたし以外にも、助っ人として先輩が 1 人いました。練習も一緒にやりました。先輩も私も練習についていくのにやっとでした。そして、毎回練習後に、「足を引っ張ることしかできてないじゃん。」「ただの迷惑じゃん。」としか思えなくなりま

した。全国大会の前日の夜助っ人の先輩のいる前で泣いてしまいました。先輩と二人きりでした。先輩にその時の心情を話しました。そしたら、先輩も泣いてくれました。「気持ちすごくわかるよ。」と言ってくれました。私はそれがすごく嬉しくて安心しました。先輩も同じ気持ちなのだ。そう思って心強くなりました。そして、泣きつかれてから、先輩が、「やらないきゃだよ。」と言ってくれました。私は自分が決めて助っ人やると決めたから責任持たないきゃ、って思いました。そのあとから、ミスしても、ずっと引きずるのではなく反省はしてすぐ切り替えるようになりました。先輩の私のために言ってくれた言葉が私を救ってくれました。このやさしさのおかげで、なんでも乗り越えようという考え方に変わりました。

優しさは人それぞれ違います。場面によっても違ってきます。優しさとは相手の気持ちを理解して、寄り添う事だと思います。そうすることで、大きく救われ、考え方が大きく変わることがあります。私は、そのような優しさを与えられるような人になっていきたいです。